

「はっさい先生」を追って

野田 泰弘

戦前の高津中学校と女性教師をモデルとしたNHK朝の連続テレビドラマ

『はっさい先生』が、昭和62年(1987)秋から放送された。

もはや、ふた昔以上も前のことになるが、覚えている方も多いと思う。

当時の平均視聴率は38.1パーセントで、その前回のBK『都の風』は

39.3パーセント。その頃の朝ドラマとしては普通の人気番組だった。

しかし、私は通勤時間と重なっていて、ほとんど見ていない。最近のNHK

『夫婦善哉』との連想で、このドラマと、実際に母校で活躍された女性教師

に近づいてみたいと思った。もとより、勝手な思い付きから始めるので、寄

り道の数々はお許し願いたい。

① ドラマ『はっさい先生』

まずは、半年間放送された『はっさい先生』(62/10/5～63/4/2)

の物語。

時代は、昭和6年から戦後の23年までに設定。東京・浅草に育ち、お茶ノ

水女子高等師範を卒業した早乙女翠(若村麻由美)は、英語の教師として大阪の

名門・上本町中学校に赴任する。タイトルの“はっさい”は発才、“元気のよい”



を意味する古い大阪弁だそうだ。

早乙女先生は、ハカマに靴という格好で自転車登校して町の注目を集め、なまいきざかりの男子生徒を相手に、経験を積んでいく。リベラルな伴校長（中村嘉葎雄）や先輩の女教師たちは彼女を暖かく見守るが、教師陣には管理重視の教頭グループもいて、周囲の軍国主義化とともに、校内の雰囲気は次第に変っていく。

他方、早乙女先生は老舗の海産問屋に下宿して、大阪生活になじみ、家族や従業員との親交を深める。

この筋書きは、漱石『坊ちゃん』に似ている。しかし、坊ちゃんが松山から東京へ戻ったのに対して、早乙女先生は一旦は教壇から去るが、下宿先の従業員（渡辺徹）と家庭を持ち、戦後は新しい中学校で、ふたたび、英語を教えることになる。



この上本町中学校が高津中学校であった。BKはドラマの企画段階から、関係者に取材し、伴校長のモデルは三沢糾（ただし）高津初代校長。また高津高の構内がドラマの場面として使用されたこともあった。

現在の高津高ホームページ「中学生のキミへメッセージ」 “高津ってどんな学校”欄にも

高津高校は、

◆1918年（大正7年）大阪府立第11中学校として創立され、大阪の繁栄の礎を築いたとされる高津宮址に立つ、歴史ある伝統校です。

◆「自由と創造」の精神と「日新日進」の校是の下、リベラルで都会的センスに満ちた雰囲気を持ち、元気で爽やかな個性溢れる生徒を育てる学校です。

（中略）

以前NHKにも取り上げられ、社会的にも注目されている面が多いです。私たち教員と生徒が一丸となって、学業や部活動、HR活動にとりくんでいます

と記されている。

ドラマ放送中の昭和63年1月に上沼八郎著『実録・はっさい先生——知られざる教師の物語』（協同出版(株)）という本が出版された。上沼氏は奈良教育大教授で、教育史が専門。本書では前編が、はっさい先生の実像と虚像、後編が三沢糾について述べている。

三沢初代高津中学校長について簡単に記載しておこう。熊本第五高校在学中にキリスト教に入信、東大哲学科、アメリカ・クラーク大学心理学科卒。広島高等師範教授、和歌山県立海草中学校長を経て大正7年4月、40才にして新設の大阪府立第十一中学校（翌8年高津中学校と改称）の校長に着任した。

入試にメンタルテストを採用したり、修身の授業として、当時としては型やぶりに英文原書『P l e a s u r e o f L i f e』（John Lubbock 著か？）を自ら教えたり、校技としてサッカーと剣道、淀川マラソンを採用、学年旅

行に富士登山、日本アルプス縦走、上海から大連などの中国旅行など数々の新機軸を実施して注目を集めた。また、そして、12年の第1回卒業式訓示に「自由と創造」を説いた。13年4月には、『はっさい先生』のモデルとなる女性教師3名を一挙採用した。三沢は翌14年に台北高等学校校長として赴任し、この後、成城学園校長、ハルピン学院院長などを歴任したが昭和17年逝去された。

② はっさい先生の実像

テレビドラマ『はっさい先生』のモデルになったのは、物語の設定より7年前、大正13年（1924）4月に高津中学校に着任した山本輝子、原照子、大井アイの3人の教師で、世間的にも話題を集めた。たとえば下記の新聞記事。



写真の左から山本輝子、原照子、大井アイの各先生。



資料としては、問題もあるが（新聞紙名・日付などは不明、しかも教師の姓名に間違いがある）、読者の関心を集める出来事だったことは裏付けられる。

記事から一部を採録しておこう。

「メンタルテスト問題で既に本紙で紹介された新し好きの三沢糾を校長にいただく大阪高津中学では、この四月の新学年から三人の女の先生を雇ひ入れることし……（中略）

また、女教師を採用するとどんな効目があるかにつき、三沢高津校長の抱負を聞く。

「第一に女教師は男教師よりも其性格が概して親切である。親切といふことは教育上必要なことで、数学など比較的難渋な学科を教へるには都合がよいと思ふ。第二に女は英語の発音が上手だから、いゝ発音の仕方を教えへる。第三に学校の経費上からも少ない費用でいゝ教員を雇ひ得る。これ等が主な理由で、この他中学生はその教師が婦人であるが故に馬鹿にするなどの風を無くするのも一つの教育である。現に米国では中学教員に多数ある。日本では東京の五中、岡山県の高梁中学に英語の女教師を採用してあるが、成績もよく、五中あたりでは、まだ増員するそうだ。当校の今度の三人の女教師採用については、府学務課とも諒解を得てゐる。」

上記校長談の中でも述べられているように、この頃、既に各地の男子中学で女性教師がぼちぼち採用されてはいたが、一時に3人採用というのが、大きく報道される理由であった。

3人は数学担当の山本輝子、英語の大井アイ、同じく英語の原照子で、ドラマの早乙女先生は、この3人のイメージを合作したものだが、なかでも、最も長く12年間在職した山本輝子先生（以下、敬称・名前略）が中心になっている。山本はドラマのように英語担当ではなかつた。

山本は奈良女高師理科を大正13年に卒業した新卒。大井は青山学院卒、原は津田塾卒、この二人は清水谷高等女学校で既に教鞭をとっていた。

3人については、『実録・はっさい先生』でも記されているが、その出典は高津同窓会名簿『群芳』の膨大な卒業生回顧談である。

私の手元にある最も古いのは、1983年版で、この頃には未だ多くの1期生などが元気で、貴重な証言を残されている。そして、これらの収集・編集の中心として額田晃作さんがおられ、本当にご苦労様でした。本稿では、額田さんたちが集められた証言を引用させてもらうが、発言者等名などは、省略する。

☆ 寄り道 I

『群芳』を繰る内に中学2期生の額田収吉という人が、野球部のほか相撲などで大活躍されていることに気づいた。「額田君（クロンボ）の技は抜群で小手をかざして落ちてくるフライの角度と速度を測りつつ、どんな軟球でもグローブに納める妙義」「グラウンドで2期生の中で一番の活躍者は額田君であった。野球に相撲に常に先頭に立っていたのが、印象的である」

この額田収吉氏が額田晃作さんの父上ではないかと思い、ご本人に確認した。額田さんは、このHPに2006年「額田医院百年」を記載されたことがあったが、父上が高津先輩だったことは触れられていない。

http://kozu5.my.coocan.jp/KozuHomePage4/KozuHomePage2/public_html/hiroba-07/06.05.31nukata.html

さらに、創学当時の野球部についても、面白いエピソードがあった。創部3年目で、初めての対抗試合を今宮中学として辛うじて勝った。その程度の実力だったのが、大正13年に新設の甲子園球場で、第10回全国中等学校野球大会が開催された年には大阪府予選で準決勝にまで進出するまでになっていた。



その頃（年度の確定が出来なかった）、府予選の主催は大阪高商（大阪市立大学の前身）であったが、準決勝の第1戦（市岡対北野）が紛糾し、第2戦の高津対明星戦が暗闇下に行われることとなった。しかし、審判は一方的に高津のコール負けを宣告し、激昂した応援者等の抗議は深夜に及んだ。翌日、三沢校長は、以降、高商主催の試合に不参加を宣言し、同時に野球連盟の設立を準備して本部を高津に置いた。

翌年の府予選は府連盟の主催となり、また、三沢校長は各地を歴訪して、全国に地方野球連盟が設立され、現在の全国高野連の前身の全中野連が出来た、というのである。（この話は、『群芳』83の吉川重信談によるが、少なくともweb検索では、他資料はない。一つの参考として留めた。）

新任の3教師はいずれも低学年を教えることとなった。高学年生の中には、彼女たちが教室前の廊下を通ると、床を踏み鳴らす者もいた。

「大井先生は、清水谷女学校で姉が教育を受けており、よく出来た姉と比較され常におしかりを受けた」（中10期）

先生方を歌った、おなじみ高津数え歌 ♪一つとせ、人も知ったるハゲ頭

三沢校長は偉いやつ。 十つとせ、年が若くてトテシャンで、みんなに好かれる原先生 ♪。

「三沢先生は、いたずら盛りの生徒たちに、『諸君は紳士たれ!』とレディーに対するマナーを厳しく教えられ『先生を困らせようと思ったら、勉強のほうで先生を困らせよ』と諭された。

☆ より道 そのII

織田作之助は（入学時は母方の鈴木姓だったが、在学中に父母が入籍し、織



田作之助となる) 大正15年入学。だから、低学年の時、女の先生に習った可能性はある。なお、先月「岩波文庫」に収載されたばかりの長編小説『青春の逆説』では、主人公のK中生活を描いている。

大井、原の両英語教師がいつまで高津に在勤したかは不明で、原は結婚して遠井姓となり、夕陽丘高女へ転勤した。「私の妹が習った。妹のクラスで、教室の破れた窓ガラスから入る寒風を防ぐため、立ち尽くして肺炎にかかり」、昭和6年没した。(中3生)

大井は昭和4年の卒業アルバムに、山本と共に顔写真が掲載されている。

山本は、三沢校長の後任羽生隆二代目校長時代も引き続き勤務した。

「数学を山本先生に習った。実に活発な男勝りの先生でした。生徒が答えをしぶっているとハイハイと次から次と名指しをされた」(中6生)

「大正14年の夏休みに、山本先生とつちめてやろうということで、むづかしい入学試験問題もっていくんですよ。ところが、もうあっさりと、さらさらと問題を解いたわけなんです。それでね、もう感心してね、初めて見直して・・・」

「小柄でね、僕ら中学1年やったけれど、僕等らと同じくらいの背丈でした。数学的な顔してはってね、いつも和服・袴姿でした。数学なんか、よォ教えはんのかと思いましたけど、そらキビキビ授業されました。みんな“オバチャン”と呼んでました。ムチ持って来はりますねん。高津の数学の先生はき

びしゅうて皆ムチ持って来はりましたけど、とくにきびしい。ときどき、ぼくらがさわぎすぎて、山本先生教室から出て行きはったこともありましたな」

(中17生)

また、校内音楽会でソプラノを独唱して、そのことを記憶していた人もいた。

(中5生)

『実録・はっさい先生』には、山本は着任時、教員心得に任用、月俸80円とある。この額であるが、大正9年の小学校教員の初任給は40~45円であったから(『値段の明治大正昭和風俗史』)、それと比較すると高給だが、男性教師と比べるとどうなのか。彼女は、その後、昭和5年には正教諭に昇格した。

昭和4年に高津着任した秋山敏先生によると、この時点で女性教師は山本のみであった。当時、英語・国語・数学の職員室は同一で、休み時間には、山本を交えて談笑したという。また、同10年頃着任の英語・柴田先生によると「私が赴任したころは、山本輝子氏(数学)一人しか残っていなかったが、別に特異な存在ではなかった。特に注目も差別もされていなかった」もはや、ベテラン教員グループの一員になっていたものであろう。

しかし残された『校報』によると、昭和5年から11年までの教職員担当で、山本は数学の教務係のみで、学級担任はしていない。しかし、秋山先生も学

級担任は、ほとんどされなかったそうなので、山本の場合も女性教員であるからとは断定できない。

山本は昭和11年6月14日付で高津退職。

裁判官と結婚して斎藤姓となったが、横浜へ移住後、妊娠中に食中毒で昭和12年3月に亡くなった。

山本の母校・奈良女子高師同窓会「佐保会」大阪支部の近江晴子さんが、彼女の生い立ちからを記している。（『群芳』86）

それによると、彼女は、明治34年（1901）生れ。夕陽丘高女卒、同校2年（16才）の時、父親に連れられて日本アルプスを踏破し、紙名不詳ながら大正5年8月18日付の「少女で日本アルプスを登攀した関西第一人の山本輝子嬢は無邪気な美しい娘さんである」と写真入り記事を見た、という。父親の家業は印刷業、自宅及び工場は東区横堀（中央区久太郎町）、当時、数少なかった日本山岳会の会員だった。さらに狂詩（漢詩をもじった滑稽詩）の著作もある。

山本は高女在学中からピアノを習い、卒業式ではピアノ伴奏を勤めた。多くの素養を身につけた最高の教養人であったことは間違いない。

こうして、山本輝子先生の足跡をたどりながら、私の念頭には、ぜひ記して



おきたいひとりの高津の女の先生があった。

高2、3と担任していただいた二川千鶴子先生である。

御存じのとおり、数学の担当であったが、数学の苦手であった私には、何とか微分積分の入り口に触れさせていた以上の感想はない。

しかし、担任としては、サバサバとした、しかし冷たい印象はなく、クラス行事なども、こまめにさばいてくださる、よき担任であった。クラスの誰かと一緒に、たしか石切りあたりのご自宅へ押だったしかけたこともあつが歓待して下さった記憶がある。何かの相談というわけでもなく、単なる野次馬気分だった。

卒業後間もなく、私は大阪を離れたが、訃報を聴いて「私達の卒業を待つて下さったのだ」と思った。

先生は、お茶の水を卒業後、清水谷で教鞭をとり、高津へ移られた。だから、高津での在職も長くはない。その内の2年間を担任していただきながら、胸中に重いものを抱いていらっしゃることは全く気付かなかった。能天気なものだった。

その後も、私たち3E組の者は、同期会の度ごとに先生のことを思い出していた。

他クラスが担任を囲んで談笑するのを横目でみながら、ある時は他クラスの輪に入れてもらったりした。

だから、遠い過去の人ではなく、高津の女の先生というテーマとしては、私としては、どうしても欠かせない先生である。

終わり